OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	ALS患者とその家族の語りに対する実存論的分析 : 本来的な《死に臨む存在》としての先駆的覚悟性への「気づき」について
Author(s)	前野, 竜太郎
Citation	臨床哲学. 2008, 9, p. 91-105
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11754
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

＜研究ノート＞

ＡＬＳ患者とその家族の語りに対する実存論的分析

―本来的な《死に臨む存在》としての先駆的覚悟性への「気づき」について

前野　竜太郎

はじめに

筋萎縮性側索硬化症（以下 ALS）という《終末》に至る難病を抱えた患者は、病める実存として「死」と向き合わなければならなくなる。「病める実存」として、身の置き所のない孤独感と絶望に苛まれる者もいる。同時に、彼らの家族は、迫る「二人称の死」に日々苦悩せざるを得なくなる。いつ果てるともなく続く絶望感や日常生活介助や介護が、肉体的、精神的に大きな負担として重くのしかかる家族も多い。

一方、現代社会における健常な人間は、死への不安を和らげるために、非本来的な了解のもと、日常生活にあってできるだけ死について考えないようにしている。非本来性の中で死を無意識下に閉じ込め、忘れようとする者もおおいのではないか。しかし、マスメディアの過剰なまでの進化は、それとは逆に、インターネット配信や液晶テレビ画面を通してニュースのなかで伝えられるテロ事件や凄惨な殺人事件を、居間や居室などプライベートな空間に、「三人称の死」としてほぼ毎日具現させる。人間はどこかで死を思い、いくら考えまいとしても、死の影に怯えざるを得なくなっているのも事実である。マスメディアを通して「生」は限りなく肯定され、その価値を高めるが、「死」は、ますます恐ろしいものとして無価値化され、遠ざけられる。結果として現代社会において、本来分かちがたいはずの人間の「死」と「生」は、互いにますます引きはがされつつある。

特に現代医療は、その臨床場面において「死」と「生」の乖離を体現している最たるものではないだろうか。例えば、老人病院において午前中に家族に見守られながらそっと搬出されていく患者の空いたベッドのまさに同じ場所に、午後には何事もなかったかのように新しい患者が入院してくる。その場において午前中の「死」と午後の「生」は、限り

なく乖離しておりつながってはいない。

どこまでも「病める実存」でありつづけなければならない ALS 患者とその家族は、このような厳しい現代医療の中で、どのように、迫りつつある「死」と折り合いをつけているのであろうか。本稿では、ALS 患者と家族のためのシンポジウムから、講演者の提言と、彼女の提言への質問をもとに、死に向き合う姿を、ハイデガーの実存論的な分析を視野にいれながら [(1)] 浮き彫りにしてみたい。

1.「死にむきあうこと」とは

ALS 患者とその家族が、「死に向きあうこと」は、心理学的な分析の対象として、E・キューブラー・ロスの唱えた「死の受容理論」に当てはめて考えていくこともできよう。しかし、我々研究者は、「死」について、そういうカテゴライズされた〈事実性〉だけを認識していればよいはずはない。彼らが「死に向きあうこと」やその「迷い」に対して問いをたて、「気づき」を構造として取り出す必要があるだろう。患者とその家族が「死ぬこと」や「死」について、もっと哲学的に深く問う可能性と向き合うべきではないか。我々医療スタッフにとっても、患者やその家族の「死」について、哲学的に深く理解することが、医療の現場において引きはがされた「生」と「死」を今一度結びつける契機となろう。

ここでは、ある ALS 患者の家族における「死と向き合えるようになった語り」の事例と、ALS を突然宣告された患者の「死の恐怖への切実な語り」の事例を取り上げ、ハイデガーが『存在と時間』で展開した実存論的な分析（＝存在論的解釈）に筆者なりの仕方で接近することを試みたい。

「現存在」はいうまでもなく、世界内存在として他者との関係性のうちにあり、他者と関わることなく「生」を全うするのは不可能である。しかし、特に「死に向き合うこと」にあっては、現存在の《死に臨む存在》としての「気づき」が、「人生の中身（Quality of Life）」を不断に「落ち着かせる」ことにつながるのではないか――これが筆者の想定である。

ALS 患者とその家族の「語り」に現れる「気づき」の構造を取り出すために、「良心」と「呼び声」、《死に臨む本来的な存在》としての「先駆的覚悟性」といういくつかの哲学的命題を手がかりに、彼らの「語り」の実存論的分析を試みたい。そして、心理学的な死の受容

理論にもとづく〈事実性〉の死ではなく、問いをたてるという哲学的な営みにおける「死」について理解を深めてゆきたい。

2. 人間存在の分析としての「実存論的分析」とは

「現存在を関心に還元し、関心をさらに時間性に還元する作業は、ハイデガーにとってはあくまでも存在一般の意味を究明するための準備作業に過ぎないのである」として、木田は、具体的な「存在一般の意味の究明」を『存在と時間』の「時間と存在」としての未刊部分に求めている。そして、既刊部分は「人間存在の分析」という「存在一般の意味の究明」のための準備作業であったとしている[(2)]。

「我々が現に存在しているということは、そのつど、ある、のさまざまな―しかも全体として統一的な―あらわれのなかへ立ちいでているということであり、そのような存在の出現にさらされて堪えつつ、存在を心得ているということである。存在全般の意味をあからさまに問うということは、この心得に徹すること、人間的存在のうちに生きている存在了解を根源的に開発しようとすることである」[(3)]。

ハイデガーはこのような「存在一般の意味の究明」という思索的性格を「基礎存在論」として位置づけ、その中心的叙述で行われていることを「実存論的分析」と呼んで、他の実存哲学者の「実存的分析」と区別しようとした。ハイデガーはこの実存論的分析について、「実存的な自己了解のためには、実存の実存構造についての理論的＝実存論的な明晰さは必ずしも要求されない」とし、「どれほど根源的な実存的理解も、まだそのままでは実存論的理解ではない」としている。細谷は、訳者後記にて次のように述べている。「表面的には、実存的というのは直接の体験に密着した物の見方であり、実存論的というのは、その体験についての理論的反省の性格である・・・。いずれにせよ『存在と時間』で展開されている思想は、なんとしてももはや実存そのものの直接的な遂行ではなく、むしろそれから或る理論的な距離をとって、実存を主題的に分析する反省である・・・」。そしてそれは「実存の遂行に直結する実存哲学ではなく、またこの立場から伝統的哲学に反抗する実存主義の哲学でもなく、実存の問題を基礎存在論という特有の反省次元へ移して分析する実存論的解釈学となったわけである」としている。

ハイデガーはまた続けて、「現存在がそのつど事実的に何へ決意するかということは、

実存論的分析においては、原理的に論究することができないことである。さらにまた当面の考究は、実存の事実的な可能性の諸相を実存論的に投企するという仕事をも、範囲外に置いている」(SZ. 383) と述べ、「実存論的分析」においては「実存の事実的な可能性の諸相を実存論的に投企するという仕事」を範囲外においているとしているが、その仕事は未完部分での構想である。更にハイデガーは続けて次のように述べている。「それにしても、現存在が自己をそこへ向かって事実的に投企するもろもろの可能性が、一般にどこから汲み取られうるのか、この点は問われなくてはならない」(SZ. 383)。“ 一般に ” という限定はつくものの、実存的投企の諸相への問いが必要でないとはしていない。

現にハイデガーは、「全体存在可能への問いは、事実的＝実存的な問いなのである。それは覚悟せるものとしての現存在によって答えられるのである」としている。この点について、細谷は次のように解説している。「要するに実存論的理解は、「現存在から超脱した永遠の静観者」の幻想的な立場から行われるものではなく、徹頭徹尾、実存的にしか遂行されえないのである」[(4)]。

それにしてもハイデガーの求める問いは、あくまでも形式論的であり、〈事実性〉に対して、何らかの答えを与える記述はないといわれる。また、ハイデガーには「他者が存在しない」とも言われる。だが、その哲学的命題は、たとえ「存在と時間」が未完であり、実存哲学を主張するものではなかったとしても、既刊部分で論述されていることそのものは、〈事実的〉な可能性の諸相を実存論的に投企する作業と離れたところで空回りしてはいない。それは、〈事実性〉を超越したところで、絶えず実存論的分析が成立していると考えられる。例えば絶望にうちひしがれ、悲しみ、悩み抜いて夜が明けるという〈事実性〉があったとして、今を意識し、今日一日を思い描いたその瞬間にその人の人生がとぎれるわけではない。〈事実性〉のなかで、死への先駆を絶えざる今に不断に投企しても、通俗的な時間表象は消えてなくなることはない。〈事実〉存在の〈事実性〉は、現存在の世界内存在としての被投性としてつながっているはずである。時間的な流れ、つまり通俗的時間表象がなければ「不断」という「今」はないと考えるのは、それこそ通俗的な考え方なのだろうか。

以上に鑑みて、「語り」という「〈事実性〉に投企された可能性」から、実存論的な分析を試みて、死に向かう姿を浮き彫りにしてみたい。

3. 死に臨む存在としての家族

まずはじめに、死に向かうある ALS 患者の二人称の死と向き合えるようになった家族の事例を検討してみたい。静岡で行われたあるシンポジウムの中で、シンポジストである ALS 患者の家族より様々な提言があったのでその「語り」を追いながら、逐次的な形で実存論的分析を試みていきたい。

このシンポジストである患者の妻は、夫が ALS という病気を発症する前までは、あたかも無限に続くような、過去を振り返る暇もない「現在」が絶えず消え去り、「今日のスケジュール」という今がやってくるといった日々を送っていた。そのような非本来的了解のもとにあった夫婦に、突然 ALS の宣告がなされ、今までの生活リズムはたちまち崩壊し、妻をはじめ家族も共に病いを抱えることになってしまったことが、次の語りから見えてくる。

「病気をする前はごく普通の夫婦でした。夫婦喧嘩もしたし、日曜日になればスーパーに買い物に行くようなどこにでもいるふつうの夫婦でした。私もまさかこのような病気に主人がかかるとは思ってもみなかったんです。それまでは、お互い仕事も持っていましたし、まったく突然のようでうけいれられなかったんです。なぜうちだけがこのようなつらい目に遭うのかとおもうと、孤独と不安でいっぱいの日々を送っていました」。

「逃避」とは言わないまでも、どこか自らの身を振り返ることを「現在」のなかに「忘却」していたため、「病い」の宣告により、突然気づかされたお互いの「生」の有限性に愕然とし、動揺が大きく、逃れられない死への絶望感を感じていることが理解される。

現存在は、日々「死への不安」をもって生きている。現存在は本質的に「死へ臨む存在」である。しかし現存在は、この死という最も固有な可能性を直視することができずに、饗応やおしゃべりに時間を浪費し、或いは世事のさまざまな気晴らしの中に自分の身を任せている。

このような非本来性における現存在は、「現在」において未来の出来事をあれこれと「予期」（Gewärtigen）し、自らの過去を振り返らずに絶えず「忘却」していく。こうして日常的な配慮の時間においては「現在」が、「過去」および「未来」に対して優位を持つ。

この場合、絶えず今が消え去りつつ次の今がやってくる。ここでは、「現在」の無限の連続としての通俗的な時間表象が成り立っている。

これは「忘却的＝現時的予期」として時熟していたとも見ることができるかもしれない。これらの予期が、自らの存在の有限性を「忘却」させ、死を身近なものとして捉えることができなくなっていたとも考えられよう。「忘却的＝現時的予期は、独特の脱自的統一態であって、非本来的了解はその時間性に関して言えば、この統一態にしたがって時熟するのである」（SZ. 339）。

ハイデガーの『存在と時間』において、死の問題はその実存論的概念の成立に向けて深められ、現存在の実存論的分析論におけるひとつの主題の意義を担っている。というのも、現存在が自己の終末である死へ先行的にかかわる存在こそは、現存在の全体的存在可能を成している本来的存在可能を動機づけるものだからである。したがって、死は現存在の存在可能性という観点から規定される。死は現存在自身の存在そのものに関わるひとごとでない最固有の（eigenst）可能性であり、また、他の何かへとかかわっていくことのない「代理不可能性」であり、自己自身が絶対的に存在しえなくなるという越えることのできない最終的な可能性である。このような死の可能性は、「関心」（ゾルゲ；Sorge）によってまとめられる世界内存在の三つに分節される構造契機（「世界」、「存在者」、「内存在」）と連関しながら、つぎのような様態で現れる。現存在は、「日常的－頽落的な契機」によって、多くの場合において自己の死の可能性を隠蔽している。それは、確実ではあってもいつ遭遇するかはわからない無規定的な可能性である死の脅威から逃れて、世人として日常性のうちへ自己喪失している非本来的な実存である。それは同時に「事実的－被投的な契機」によって、自己の死への運命を前にした不安の気分を恒常的に包摂している。しかし、己に先立つ「実存的－投企的」な契機は、〈死へ臨む存在〉（Sein zum Tode）として最も根源的に具現される。

シンポジストは、夫が ALS と宣告された後の生活について、続けて次のように述懐している。

「・・・うちは田舎ですから、近所ともあまり話をしなくなり、どちらかというと、うちへひきこもりがちになっていったんです。けれどもある日、装具を直しにやってきた理学療法士の先生が、それがきっかけでうちの住宅改修をしてくださったんです

ね。そのときにとてもよくしていただいて、それがきっかけになって、だんだん訪問看護スタッフや、地域のケアマネさんが頻繁に来るようになって、「私は一人ではないんだ。」ということに気がつきました」。

結果的に私一人ではないことが明らかになっているが、ここでは、世界内存在としての被投性の自覚から、未だ覚悟性へは向かっていないとも考えられる。しかし、絶望的な状況を脱して、他者とのコミュニケーションを積極的に持とうと変化してきている。この変化こそが、「関心」からの呼び声としての「良心」に他ならないのではないか。他者の働きかけにより自らが「気づく」構造は、ここから始まっているのではないだろうか。

ハイデガーによれば、「良心」とは、現存在を、存在問題を隠蔽する存在様態（非本来性）にあることから解放し、己の存在の事実 (Faktum) に直面する存在様態（本来性）へと向かわせる現存在の本来的実存的な可能性の証である。「良心」は、現存在の根源とされる「関心」からの呼び声にほかならないとされる。

良心は現存在が「負い目がある」（schuldig）ものだという警告を与えるが、その「負い目」とは現存在の被投性、とりわけ自己の根拠を自ら置いたのではないという性格、すなわち非力さ（Nichtigkeit）である。現存在の本来性への鍵は被投性の自覚にある。

「それから何年かして、人工呼吸器をつけるかどうかで悩んだときも、娘に相談しました。その娘のすすめもあって最後は呼吸器をつけることにしました。今も本当に困ったときは娘や家族に相談しています。ふりかえってみれば、主人は、発病後 4 年目になりますが、3 年目までは本当に大変だったんです」。

妻は、夫以外の他者とコミュニケーションをとらない消極性から脱出できなければ、信頼している娘にさえ相談すること困難であっただろう。自らの「負い目」すなわち現存在の被投性或いは「非力さ」に気がつかなければ、何年も家に閉じこもることになったかもしれない。当然夫の人工呼吸器装着の決断も難しかったであろう。「非力さ」とは、単に力が足りないという意味ではない。ひとは誰も、生まれようと意図してこの世に生を受けたわけではないことは自明である。ひとは皆偶然のごとく世界に投げ出されて今を生きている。それをハイデガーは敢えて「非力さ」と呼んでいる。このような「関心」からの「良心」の「呼び声」に気づき了解したことで、はじめて他者を受け入れる余地が生まれたと

思われる。

4. ALS 患者とその家族の《死に臨む存在》としての「覚悟性」

ひとのなかに埋没し自己を喪失している日常的で非本来的な現存在に向かって、良心は自己を取り戻すよう呼びかけるが、この「呼び声」を理解して「良心を持とうとする意志」をもつことが「覚悟性」である。そして「良心を持とうとする意志」は、「沈黙し、不安を受け入れ、最も自己的な負い目ある存在へと自己を投企すること」である。この未規定性は、覚悟性が開示する状況のなかでそのつどの事実的な可能性へと投企すること、つまり覚悟（Entschluß）によって実存的に規定されている。ところで、現存在はいつでもすでに非覚悟性のうちにあるから、全体的恒常的であるためには、覚悟性は、現存在の全体性（誕生から死まで）を開示し先取りさせる〈死への先駆〉と結びつかなければならない。それゆえ、覚悟性の本来的な可能性は〈先駆的覚悟性〉であり、先駆的覚悟性は現存在の実存的に本来的な全体存在可能である。

他者を受け入れ、「積極的に外にでるようになった」妻が、《死に臨む本来的な存在》として、先駆的に覚悟性に臨む決定的となったきっかけは、妻自身の入院であった。それは、妻の生き方だけでなく、夫に対する思いを 180 度変えることになる。

> 「とにかく主人には、1 日でも長く生きていてもらいたい、という態度でかかわってきたんですが、私自身の入院によって改めて自分の死を感じたというか、誰にでも死はあるんだなと感じました。入院を期に私にも死があるかわりに夫にも死があるのだなと感じたんです。これまで、とにかく生きていて欲しいと、生と死との別れ目にいることの負担を感じてきたのですが、今回入院してみて誰にでも死ぬ可能性があるということを素直に受け止められるようになりました。落ち着きを感じられるようになったのです」。

先駆的に覚悟性を引き受ける、つまり自身が有限な存在であることに気づくためには、自分の死について見つめ直すことが鍵となる。ほかならぬ「私」の死を通して、初めて本来的な意味の死が明らかになる。死は「代理不可能性」であり、一人称の死に臨むことがで

きるのは、「この私」だけである。この点は、「有限な存在への問い」としてハイデガーの存在論につながっている。

そして「私自身の入院によって改めて自分の死を感じた」という「一人称の死」をみつめることが、「誰にでも死はあるんだな」という気づきをもたらし、「私にも死があるかわりに夫にも死があるのだなと感じた」のである。先駆的覚悟性において「一人称の死」に臨むことから、「二人称の死」をみつめられることが、本来的な自己存在可能性を明確にするのである。「良心の呼び声が了解されるとき、世間への紛れがあらわになる。覚悟性は、現存在をひとごとでない自己存在可能性へ向かって連れ戻す。そして、死へ臨んでそれがひとごとでないおのれの可能性であることを了解するとき、各自の存在可能性は本来的にかつ全体的に透察的なものになるのである」(SZ. 307)。

敷衍していうならば、「先駆」とは、自分がいつか死ぬ存在であることへの気づきと深い自覚である。そして、「覚悟性」とは、良心を持とうと決意することであり、「ひとごとでないおのれの負い目ある存在へむかって、自ら不安を辞することなく、沈黙のうちに己を投企すること」(SZ. 382) である。そしてその「覚悟性は、〈死へ臨む本来的な存在〉を己自身の本来性の可能的な実存的様態としてもともと包蔵しているのである」(SZ. 305)。

この事例の場合、「死は誰にでもある」と気づくことで、冷静に夫に死の可能性があることを見つめることができた。「これまで、とにかく生きていて欲しいと、生と死との別れ目にいることの負担を感じて」いたことから、初めて解放され、「落ち着きを感じられるようになった」のである。「素直に受け止め」られるようになったのは、妻自身が《死へ臨む本来的な存在》として気づきえたからであると考える。「現存在がおのれの存在可能へ根源的に臨んでいるあり方は、《死へ臨む存在》である。それはすなわち、われわれが特徴づけておいたような、現存在の際立った可能性へ臨む存在である。先駆はこの可能性を可能性として開示する。こうして、覚悟性は、先駆する覚悟性となってはじめて、現存在のもっとも固有な存在可能へ向かう根源的存在となるのである」(SZ. 306)。

5.《死に臨む存在》への気づきと「根源的時間」

「関心」という中立な構造が死への「先駆的覚悟性」として志向されることで、現存在の全体性と本来性は臨証される。ハイデガーはここで「先駆的覚悟性」を可能ならしめて

いるものを、「時間性」と呼んだ。なぜなら、先駆的覚悟性とは、先に述べたように、己の死へと覚悟を定めることによって真の己へ到来する。それは既在性の己に立ち返り、それを今現在に引き受け直すことであり、能動的に己の置かれた状況を現前させることもあわせもつからである。つまり、ここで経験されるものこそが時間の根源的現象＝「根源的時間」(SZ. 329) である。ハイデガーによれば、時間というものは根源的に存在するものではなく、「己を時間として生起せしめるものである」。我々が時間と認識しているものは、つまり時計を介しての「等質的な今の継起」としての時間は、このように根源的に生起する時間の派生態である、としている。ハイデガーが「根源的時間」としたのは、アメのように長く伸びた時間概念ではなく、「かけがえのない今」としての時間継起であり、先駆的覚悟性は「現在」としてのその「瞬間」に生起されるとしている。

将来－既在－現在を恒常的に生起せしめる根源的時間の脱自的な性格を、彼は時間性の「脱自態」(SZ. 329) と呼ぶ。時間性はこうした諸脱自態の統一態として生起されるのである。

妻は、人工呼吸器の装着について、娘と相談して決断したにもかかわらず、その後何度も悩んでいた。

「ふりかえってみれば、主人は、発病後 4 年目になりますが、3 年目までは本当に大変だったんです。特に人工呼吸器を装着してからも、これでよかったのだろうかとなやんだり、うろたえたりと、娘に相談したにもかかわらず、自分を納得させるのにすごく時間がかかったんです。ですが、落ち着くときがきっとくるんです。」

実際に人工呼吸器を装着した夫を目の前にして―人工呼吸器は最近かなりコンパクトになってきたが―、それでもやはり、管の入らない、「元気できれいな体でいてほしい」ということや、こんなロボットみたいな機械をつけて苦しいのではないかという思いが頭から離れないことも、悩む原因であっただろう。或いは声を出すことが大変でコミュニケーションがとりづらくなったことも、後悔した原因かもしれない。決して夫が「健康体で生きてほしい」ということに固執しているわけではなく、妻はただ夫が夫自身の生を全うしてほしいと考えているだけなのである。いずれにしても、人工呼吸器の装着により、そういった非本来的な了解ともいうべきものが、夫の生という全体的存在可能から離れたと

ころで「新たな存在の苦悩」として立ち現れてくる。しかし、妻は自らに言い聞かせるように繰り返し自分を納得させようとするのだが、ある時本来的了解へ至る「良心」の「呼び声」がきこえてくる。そのきっかけは妻自身の入院であった。その「良心」の「呼び声」のもと、先駆的覚悟性をもって《死に臨む存在》として非本来的了解から、絶えざる今として不断に本来的存在へいたる。そのことが、本来的時間性（＝根源的時間）のなかで問われることで存在の意味への「気づき」へとつながっている。

「夫はいつか死ぬかもしれない。しかし、生きていて欲しいという願いのもと今まで生かされてきたかもしれない。けれども入院を期に、「夫はもう少し生きていたいんだ」ということを感じられるようになったんです。なぜ感じられるようになったかといわれれば、今までの人生やら夫と一緒の生活の中から感じられるようになった気がします。ただ（人工呼吸器の装着のことは）これでよかったという確信もないし、正直わかりません。しかし、素直になれたのです」。

妻は、能動的に己の置かれた状況を現前させ、既在性の己に立ち返り、今現在に引き受け直すことで、先駆的な覚悟性に臨むことが可能となっている。「夫はもう少し生きていたいんだ」という語りは、決して人工呼吸器をつけてよかったという意味ではない。人工呼吸器をつけて、夫の生を全うすることを夫自身も希望していることに気づいたことを意味しているのである。つまり、《死へ臨む存在》として、本来的な了解によって、夫の立場になって素直に考えられるようになっているようにみえる。

「じっさい、呼びかけは決してわれわれ自身が計画したり準備したり随意に履行したりしたものではない。思いがけなく、それどころか、心ならずも、《呼び声がする》のである。そうかといって、その呼び声が、私と共に世界の内に居る他の人から聞こえてくるのではないことも、疑いのないことである。良心の呼び声は、私の内からしかも私を越えて聞こえてくる」（SZ. 275）。「心ならずも声がする」とは、ハイデガーの存在論には他者が存在しない例ともとれる。しかし、〈事実性〉に立ち返れば、悩みを非本来的了解の中で繰り返した後、妻自身の入院というきっかけがあったが、ある時「良心」の「呼び声」が「私の内からしかも私を越えて聞こえて」きたのではないか。これは娘をはじめいくら他者からの働きかけがあっても、彼女自身が全体的存在可能に気づかなければ、つまり、《死へ

臨む存在》であることに気づかなければ、状況は何も変わらなかったということを示している。

現存在はいうまでもなく、世界内存在として他者との関係性のうちにあり、他者と関わることなく生きるのは不可能である。しかし殊に「死に向き合うこと」にあっては、現存在の《死に臨む存在》としての「気づき」が、「人生の中身」を不断に「落ち着かせる」ことにもつながっていると見ることもできると考えた。このことを彼女自身のシンポジストとしての結語によって明示したい。

「私は今主人を支えていますが、私は主人によって支えられているような気がします。」

妻が今現在の心境として語ったこの語りは、ある意味「悟り」のように彼女を不断に落ち着かせている。現存在は、「一人称の死」に気づくことからしか、「二人称の死」を深く理解することができない。「存在の有限性」に「気づく」ことが、他者への深い理解につながると考える。

6. 死の恐怖への切実な語りを通して

しかし一方で、病める実存としての年月を重ねたからといって必ずしも全てこのような過程をたどるわけではない。次に、このシンポジストの発表の後の討論の際、怒りをあらわにしながら、切実に死への恐怖を語った主婦の語りを以下にまとめたい。

「私は、いままでのそれを聴いていて、すぐ先に死があるような気がしてやだなと思いました。というのは、私は（言葉を詰まらせながら、）3 ヶ月前に ALS の診断を受けたんです。今まで（以降、嗚咽を繰り返しながら）、今まで病気の夫の介護が先で私のことなんか後回しにしてきたので、私がまさかこんな病気にかかっていようとは思いもかけなかったんです。 1 年ほど前から、なんか肩がこって、足がつるようになって、息子に「なんだか足が細くなったね。かあさん病院に行ってきたほうがいいよ」って言われて病院を受診したんです。検査結果が 1 週間後にわかるからといわれて、1 週間後にいったんです。そしたら、何の前触れも説明もなくいきなりいわれたんです。あ

なたは「筋萎縮性側索硬化症、ALS です」って。そっからさきは頭の中がもう真っ白になって予後のこととかいわれたんですけど全く覚えていないんです。それどころか何で、いきなり告知をするのかって後から怒りがこみ上げてきて、何で私がこんな病気にかからないといけないのかと。なんでこんなに早く死ななければならないのかと思うと辛くてたまりません。毎日毎日、日毎に足が細くなっていくのがわかるんです。こんな辛さ皆さんにはわかりますか。日に日に足が細くなっていくことにどれだけ恐怖を覚えるか皆さんわかりますか。それを皆さんの先ほどからのお話を聴いていると、ALS ＝早速死が待ち構えているような感じがして皆さんの仲間に入りたくなかったんです。今でも立ち上がろうとすると後ろへ倒れるような気がしますし、歩くとすぐつかれてしまいます。だけれども、いずれ人工呼吸器をつけなきゃいけないなんて考えられません」。

この事例の場合、「何の説明もなく」いきなり ALS と告知されたことへの主治医への怒りがあらわになっている。いきなり告知したことへの是非はともかく、強制的に死に臨まなければならなくなった孤独感は察するにあまりある。まさに断末魔のごとき語りである。特に「今まで病気の夫の介護が先で私のことなんか後回しにしてきたので、私がまさかこんな病気にかかっていようとは思いもかけなかったんです。」という語りが深く印象に残る。介護負担という心労が重なって、自らをかえりみる時間さえ許されない状態のまま、更に死への恐怖と戦わなければならなくなってしまった二重三重のつらさがこの語りには現れている。

先ほど述べた受け入れができている事例でも、個人によって差こそあれ、「病める実存」は皆こういった側面を内に持っていると考えられる。病い経験の最初の段階は、孤独感に耐えられないことも多く、病い経験は孤独感からはじまると言っても過言ではないであろう。逆に言えば、その孤独感ゆえに「存在の有限性」が際立ってくるのが理解されよう。「一人称の死」に向き合う人は、ほかのだれでもなく、かけがえのないこの「私」である。

おそらく、シンポジストの事例とは異なり、何らかの形で時熟していく（＝おのずから時が生成される）には困難な事例とも見られる。これからも、決して彼女のトラウマとなった心は氷解しないかもしれない。前章までのなんとか折り合いをつけていく過程と、この死の恐怖におののく語りを並べて比較することはできない。受け入れられなくとも実存として当然のことであり、ここで、優劣を比較するものでは決してない。しかし、少な

くとも「なぜ私が？」に対しては、単に心理学的な悲嘆カウンセリングだけでなく、哲学的対話の重要性を感じる。患者自らの人生において、これだけ苦悩したという貴重な経験として、臨床家はその人を支える必要があろう。

7. 本来性と非本来性との往還

これまで述べてきた非本来性或いは非本来的了解は、本来的存在と決して二項対立ではなく、ハイデガーは、非本来性は本来性の変形であるとしている。この二つの存在様態は、現存在にともに内包されている。「現存在の非本来性とは、この様態における現存在の存在が「一段と乏しい」とか、その存在の度合が「低い」とかいう意味ではない。むしろ、非本来性は、多忙や活気や興味や享楽などのきわめて充実した具体相においても、現存在を規定していることがあるのである」(SZ. 43) としている。

死から逃避し、忘却しようとするのではなく、死を通して自らが有限な存在であることに気づくことは、せまりつつある死と折り合いをつける一つのヒントであるかもしれない。明日死ぬかもしれないという可能性を受け入れることは、残された時間を価値あるものとすることができるかもしれない。そのひとの死を引き受け直すことで本来的存在としての可能性を垣間見られるかもしれない。死を引き受けることによって、ひとは「人生の中身」を不断に落ち着かせることができるとも考えられよう。しかし一方で、第二の語りは、そのいずれも受け入れがたい現実であり、「生きたい」という一方向的な渇望の中で迷い苦しんでいる例である。「死」は一生受け入れられない事例であるとも考えられる。

非本来性と本来性が二項対立ではない以上、境目のないこの二項の間の往還が第二の事例に示唆を与えるのではないか。つまり、「迷い」と「気づき」の往還が何度も繰り返されながら時熟していく。苦悩は一度きりで終わることはない。解決が得られたとしても、また様々な不可抗力が迷いへと引き戻す。「気づき」と「迷い」を繰り返しながら日々生きることが「死」に「向かい合う」ことに折り合いをつけることになるであろう。

参考文献

M.Heidegger, *Being and Time*, Harper Collins, 1962

M.Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer, 2006

木田元『ハイデガーの思想』, 岩波新書, 1993

木田元『ハイデガー』, 岩波現代文庫, 2001

E. キューブラー・ロス『死ぬ瞬間―死とその過程について』, 鈴木晶訳, 中公文庫 , 2001

注

1 ただし、小論は必ずしもハイデガーの用語法を十分に理解してそれに従っているとはいえず、この点は今後改善していきたい。

2 木田元 ,『ハイデガーの思想』, 岩波新書 , 1993

3 M・ハイデガー , 細谷貞雄訳 ,『存在と時間』上・下巻 , ちくま学芸文庫 , 1994, p. 459

4 M・ハイデガー , 細谷貞雄訳 ,『存在と時間』上・下巻 , ちくま学芸文庫 , 1994